

混迷する欧州：英国のEU離脱と高まるドイツへの期待と懸念

(1) 英国総選挙でBREXIT（英国のEU離脱）はほぼ決まった

英国国民の過半数は先週の総選挙でEU内での共存共栄よりも誇り高い孤立を選びました。若者や産業界が推すEU残留（理性）より、中高年や地方のナショナリズム（感情）が上回ったのです。輝かしい伝統と爛熟した文化を持つ英国人が、国家主義という船に乗せられて荒海に漂流しないよう祈るばかりです。

EUの一加盟国でありながら、常に特別扱いを要求してきた英国は、政策決定機関であるEU理事会の決議方式に多数決方式が採用されて以来（2014、リスボン条約）、多数決で仕切られることに不満を募らせていたと思います。かつて英連邦に君臨した盟主であり、1941年のナチス・ドイツによるロンドン大空襲（Blitz）に耐えて第二次世界大戦の戦勝国となった誇りとドイツ人への優越感を、中高年の英国人は今も持ち続けているように思えます。経済規模ではドイツを下回っていても、EUの中の“One of them”では嫌なのです。

一方独仏は「公平な競争」を常に要求します。メルケル（独）とマクロン（仏）が采配を振るうEUの指令に従う「屈辱」から、トランプ大統領が親友と呼ぶジョンソン首相の国家主義が解き放ってくれたのが今回の選挙結果でした。

(2) BREXITに立ちふさがる難問・鬼門

ジョンブル（John Bull）のプライドはジョンソンの作戦によって一応保たれましたが、その代償はあまりにも大きいと言わざるを得ません。決められた移行期間（11か月）の間に、EUと自由貿易協定（FTA）を結ぶのは至難の業です。「合意なき離脱」となった場合、輸出の4割以上を占める対EU貿易に関税が課され、人がドーヴァー海峡をフェリーで渡るだけでもヴィザが要ります。金融センター・シティーで働くEU出身の若者も、大学の研究者・学生の移動も面倒になります。何かにつけて、膨大な書類が迅速な行動を阻みます。

メルケル独首相はじめEU首脳は、「いいとこどり」を許さない姿勢ですが、ジョンソン首相は米国との血の繋がりに、はかない期待を抱いているようです。しかし、選挙の支持者が生産する遺伝子組み換えの大豆の売りさばきや銭勘定以外興味のない大統領が、EUを飛び出した昔のジョンブルを特別待遇するでしょうか。差しのdealでの損得が生き甲斐の大統領が、英国が満足するようなFTAを結ぶわけがありません。大国意識を捨てて、カナダやノールウェー並みの協定に活路を求めざるを得ない可能性は否定できません。

以前から独立とEU加盟を目指すスコットランドや、豊かなEU加盟国アイルランドを横目に見る北アイルランドも、グレート・ブリテン（連合王国）にとって深刻な分裂の懸念材料です。欧州の混迷は益々深まっています。

(3) EU本来の目的は何だったのか？

“EUの父”の一人に、青山光子の次男リヒアルト・クーデンホフ・カレルギー伯がいます。その名著“Pan-Europa” 1923 で彼はポーランドからポルトガルまでのヨーロッパは、それぞれが持つ輝かしい歴史と文化を大切に、狭い欧州地域で緊密に連携すべきである。そして汎ヨーロッパ、汎アメリカ、大英帝国などの五大超国家による恒久平和と経済的発展を確実なものにすべきであるとの一大構想を提起しました。しかし、その具体的目的は、欧州の小国が結束して軍事大国旧ロシアに対抗し、また急速に発展する新興国アメリカ合衆国への人材流出を防ぐ意図でした。フランス外相（首相）のブリアン、ドイツの首相（外相）シュトレゼマンの強力なサポートもあって多くの支持者を得ましたが、ナチズムの台頭と第二次世界大戦の勃発で具体化に至りませんでした。

戦後、欧州大陸の国々はまず歴史と文化と共通の価値観で結束したのです。

(4) 英国はヨーロッパか？

産業革命の恩恵と植民地支配から得た富を背景に、大英帝国はパックス・ブリタニカを謳歌し、階級制度のもと貴族と富裕層の間に絢爛たる文化が栄えました。良質廉価な英国製綿糸布が世界を席卷した時、後進国ドイツが関税同盟で対抗しなかったら英国の植民地になっていたかもしれません。旧植民地米国とは血縁で固く結ばれ、豪州、インド、カナダ、マレーシアなどと結んだ英連邦は盤石で、英国人の実力とそれに見合ったプライドは世界が認めるどころでした。ですから長い間、英国にとって独仏などは対等な相手ではなかったのです。

1963年その英国がEC（EUの前身）に加盟を申し込んだとき、ドゴール仏大統領が「英国は米国のトロイの馬だ」と言って反対したのは有名な話です。ドゴールは大変な慧眼の持ち主で、植民地アルジェリア（イスラム）の独立を1963年に認めたのも正解でした。

サッチャー元首相は、東西ドイツの統一に猛反対しました。ドイツを潜在的脅威と見るフランスは、統一後のドイツはEUの一員として閉じ込め、かつ強力な通貨ドイツマルクを放棄させて共通通貨ユーロを使わせることを条件としてドイツの統一に同意しました。（半身の英国はEU加盟後も伝統的通貨ポンドを手放さず、人の動きを保障するシェンゲン条約にも入りませんでした。自国の経済的利益のみを意図したと言っても過言ではありません。）英仏が反対する中、ソ連のゴルバチョフが、ソ連軍の東独駐屯費用を肩代わりするようコールドイツ首相に要求したのは、まさに千載一遇の取引で、東西ドイツ統一の追い風になりました。（いま隆盛な右翼政党 AfD＝ドイツの為の選択肢＝も、草創期にはドイツマルクの放棄とユーロの採用に反対する経済学者のグループでした。）

ドイツの産業競争力は、冷戦下の「経済復興の奇跡」を境に英国を凌ぐようになりました。経済小国の旧東欧諸国の加盟や、ギリシャなどの債務危機のたびにユーロ安が起きました。輸出大国のドイツに黒字が積み上がり、独り勝ちが顕著になりました。いま英国は世界に誇る金融街“シティ”を中核とする国際金融センターに活路を見出しています。しかしそれもEU内で認められている“single passport”が非加盟国英国には不適用になりますから、在英の銀行・証券は欧州大陸にシフトするでしょう。

EU第2の経済大国イギリスを失うことは、EUにとって大きな痛手です。文化・人材の交流も阻害されます。更に、かねてから独立志向の強いスコットランドや、EU加盟国として繁栄するアイルランドを横目に見る英領北アイルランドの国境問題も燻っています。連合王国の分裂の危機です。

ジョンソン首相は、ナチスの空爆に耐えドイツに打ち勝ったチャーチル元首相を師と仰いで国民を鼓舞し、先の総選挙で大勝しましたが、山積する深刻な諸問題にどう立ち向かうのでしょうか？

(5) BREXIT後のドイツへの期待と強化への懸念

ドイツ人はBREXITをどう見ているでしょう？ 日刊紙ハンデルスプラットは「ジョンソン英首相のEU離脱は“神風攻撃”だ。」(註：ドイツ人は無謀な行為に対して Kamikaze、自滅行為に対して Harakiri と今でも結構使います(本協会大堀理事談))。また同紙は「英国の離脱で、EUの地理的な中心(der Nabel=へそ)が変わり、ピュルツブルクのそばの農地になる」とも書いています。これは単に地理上のジョークではなく、英国の離脱と旧東欧へのEU拡大でドイツの役割が更に重くなることへの示唆でしょう。仏伊など南欧加盟国だけでなく、IMF(国際通貨基金)などEU域外からも、ドイツに対する財政出動の要請が高まっています。

EUの盟主とも言われたメルケル首相の時代は、財政均衡とドイツ独り勝ちの時代と言えます。しかし難民政策への内外の抵抗や右翼政党AfDの議席増大によって、メルケル首相のリーダーシップにも陰りが見えています。英国の離脱、メルケル対トランプの溝の深まり、国内野党の続伸等の逆風に耐えながら、自国の経済力を更に伸ばし、今後2年間の在位中にいかにEUをまとめていくかが注目されます。戦後ドイツは、ナチス時代の負の遺産を意識して、常に「欧州の中のドイツ」として振舞い、「ドイツの欧州」となることを避けてきました。しかしここに来てEUの崩壊を食い止めるために、フランスとも連携するドイツの強力な指導力に期待が高まっています。昨年12月就任したEU委員長フォンデアライエン女史は“EUの申し子”で、前ドイツ国防相として長年メルケル内閣を支えてきました。早くも環境問題で指導力を発揮し、その欧州人としての優れたバランス感覚に注目が集まります。

アメリカ第一主義をはじめとしたナショナリズムが蔓延する中で、それに対抗するドイツがかつての悪夢を再現するのではないかと懸念する声も聞かれます(“新ドイツ問題”)。しかし戦後75年、「私は欧州人=“Ich bin ein Europäer”」と胸を張って自認し、他の欧州人と価値観を共有するドイツ人が、時計を逆戻りさせる姿は想像できません。マース独外相が一昨年来日して日本の友に語りかけたように、米中のような“Rule maker”にはなれなくとも、平和、民主主義、自由市場を標榜する日独は、その知見をもって世界を融和させる“rule shaper”になる道を歩むべきでしょう。(了)

JDGYは今年設立10年目に入ります。会員皆様のご健勝・ご多幸をお祈り申し上げます。(了)

横浜日独協会会長 早瀬 勇